

那須烏山ジオパーク構想推進事業に関わる講座等の実施

事業代表者（教育学部・教授・松居誠一郎）

1. 事業の目的・意義

那須烏山市では市内の地質などの自然資産を生かして、平成29年度にジオパークとしての登録を目指している。ジオパーク認定の条件として、地域社会でジオパークが広く認知され、地域外からの見学者を温かく迎える体制の整備が求められている。その証とし現地のガイドを行えるボランティア組織が活動していることが求められる。この事業では、ジオパークのガイドを育成するための講座を那須烏山市役所、栃木県立博物館と連携して実施した。また他地域のジオパークの活動実態を調査し、見学者を迎え入れるための人的体制づくりについても検討した。

那須烏山ジオパークは那須烏山地域にある地層、地形、動植物などの自然環境資源を保全しながら学習や観光に活用することを目的に構想されている。具体的には、本地域には新第三紀の1輪廻の海進海退堆積物があり、貝などの無脊椎動物、クジラなどの脊椎動物、さらに微化石などが豊富に産し、この時代の国内における標準層序の1つとなっている。また河成段丘が広く分布し、それを下刻して複雑に蛇行した河川が流れ下り、平野部であるにもかかわらず大きな滝が存在する。そうした自然環境とかがわりながら続いた人類の営みも、旧石器時代以降の遺跡や、現在に続く里山・里川の利用など様々な形で観察することができる。こうした自然環境と自然と人とのかかわりの歴史を実感を持って体験できる場所としてこのジオパークは構想されている。

2. 事業内容

(1) ジオガイド養成講座

ジオパークは単に景観を楽しむだけでなく、そこに見られる様々な自然現象を深く理解できることを目指しており、そのためにはガイドブック、現地の掲示など様々な手段での解説が重要となる。しかし、なにより現地に住む人たちによる、言葉

による解説に勝るものはないであろう。とくに自然と人とのかかわりについては、こうしたコミュニケーションが重要になる。そのために今年度は「ジオパークガイド養成講座」を一般市民を対象に開設し、室内における説明と現地見学を組み合わせた学習会を実施した。

ここでは参加者がジオパーク対象地域の地層、地形、動植物など自然環境全般に理解を深めると同時に、現地での安全な見学、自然資源の保全、見学者とのコミュニケーション能力など、ガイドとして求められる幅広い知識とスキルを身に付けられるように計画した。

那須烏山市役所の募集に対して38名の応募があった。退職した高齢者が主体であるが、小学生1名、中学生1名、高校生3名の参加もあった。また女性は9名であった。市外からの参加は10名あり、関心の広がりが見えた。

下記の日程と内容で講座を実施した。毎回、10時から11時半程度に那須烏山市役所南那須庁舎において室内でのジオパークについての全般的解説と、見学コースについての具体的な解説が行われ、その後バスで現地において観察方法、説明の方法の解説をおこなった。各回の参加者は20から30名程度であった。



図1 室内講習

2016年10月2日 テーマ:「小学生向け地層観察ガイド」 室内で栃木県の地質と那須烏山ジオパークの概要及び小学校の地層観察のための校外学習における注意点の解説があった。その後、野外観察をおこなった。曲畑では第四紀の境林レキ層の粘土、砂、レキからなる未固結の堆積物を観察した。また万行、中山などで新第三系の堆積岩と化石を、また志鳥では関東ローム層をそれぞれ観察した。

2016年11月23日 「滝駅周辺のコースガイド」 龍門の滝において平野部にある滝の特徴を観察した。戦前に軍事用に新第三系の火山砕屑岩類をくりぬいて作られた洞窟が現在日本酒の熟成用に有効利用されている現場を見学した。

2016年12月17日 「大金駅周辺のコースガイド」 荒川の蛇行地形と化石産地などを見学した。

2017年1月14日 「小壩駅周辺のコースガイド」 荒川に沿って露出する新第三系の地層を見学した。また猿久保田んぼ公園では那須烏山ジオパークの特徴である里山の景観を見学した。

2017年2月5日 「三箇から下川井周辺のコースガイド」 プナ残存林、小白井不整合、シモツケコウホネ自生地のコースを見学した。

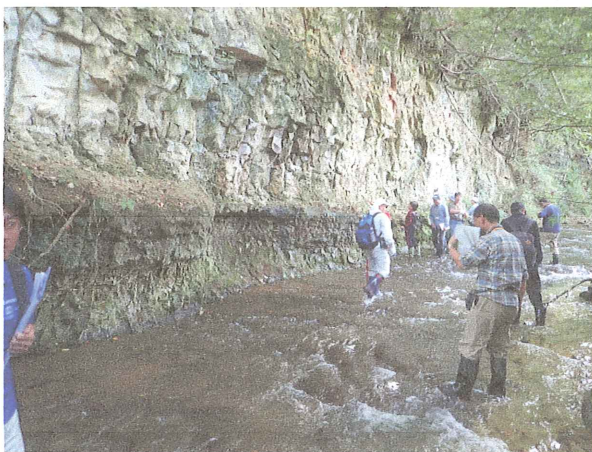


図2 野外講習

2017年3月25日 茨城北ジオパークにおいて現地ガイド(インタープリター)をお願いして見学会を実施し、案内を体験するとともに、交

流を深め、ガイドの方法について情報を提供していただいた。

(2) 講座の準備のための調査

2016年8月4日 大金駅周辺のコースについて見学内容、安全性などを事前調査し、ガイドの要点をまとめた。

2016年11月27日28日に伊豆半島ジオパークを実地調査した。伊豆半島ジオパークは2012年にジオパーク認定を受け、現在世界ジオパーク認定を目指している先進事例である。このジオパークの核心部分の1つである、浄蓮の滝・七滝、下田地域で現地調査を行った。遊歩道や掲示板などの施設やパンフレット類が非常に整備されており、見学内容が理解しやすく、また安全に見学できるように工夫されていた。しかし、観光関係の業者、たとえばタクシー関係者、宿泊施設関係者、お土産物業者などでのジオパークに関する認知度が必ずしも高くないことが明らかとなった。このことは一昨年度調査した銚子ジオパークにおいても観察された。観光関係者は見学に来た人たちに最も密に接する立場にあることを考えると、ジオパークについての認識を深められるような方策が必要と思われる。このためには、ジオパークが観光の振興にもつながることも強調して、説明会、講座等を行うのが望ましいであろう。

3. 事業の進捗状況

今年度計画した「ジオガイド養成講座」は予定通り実施することができ、30名ほどのガイドを認定できる見込みである。現地の事前調査では標準的コースの見どころ、利用しやすさ、安全性などの問題点を明らかにして、ガイド養成講座実施に反映させることができた。また茨城北ジオパークのインタープリターの現地案内を体験できたことは受講者にとって大いに学習効果があったと思われる。伊豆半島ジオパークでは先進地におけるコースづくり、掲示やパンフレットなどを現地で確認し、那須烏山ジオパークの状況にあったコースガイドのあり方を検討することができた。

4. 事業の成果

今回の一連の講座実施によって平成29年5月に予定しているジオパーク申請に向けての条件づくりの1つにめどがついたことになる。また講座実施とともに行った現地調査や伊豆半島ジオパークの調査を通じて、那須烏山ジオパーク成立のために必要な地域の条件整備の方向性を明らかにすることができた。

5. 今後の展望

来年度も継続してガイド養成講座を実施する予定で、今後は現地での安全対策や話し方の工夫などさらに実践的なガイド能力の育成に向けた内容を盛り込む予定である。

伊豆半島はジオパーク認定のはるか以前から観光地として発展していた地域でありながら、ジオパーク活動と観光業との連携が必ずしも十分でない点は参考にすべき点であろう。来年度以降、地元の受け入れ態勢整備のために、ガイド養成以外の広報、教育活動を強化する必要があるだろう。



図3 伊豆半島ジオパーク七滝付近のコース整備状況(上)と案内看板(下)